

新連載執筆のねらいと執筆者紹介

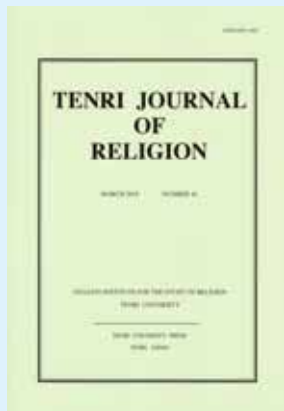
「ニューヨーク通信」

ニューヨーク天理文化協会は、2021年に設立30周年を迎えようとしている。文化協会会長であった板倉知治アメリカ伝道庁長は、オープニングレセプションの際、教内関係者に「天理文化協会は単にニューヨーク地区の事業ではなく、アメリカ全管内、全天理教的な事業である」と挨拶された。また、2010年には、天理大学と学术交流提携を交わし、天理大学ニューヨークキャンパスとしての役割も担っている。文化協会での様々な動きを広く知っていただき、共有していただくとともに、全天理教的にどのように活かしていくか、読者諸氏からのさらなる温かい支援と叱咤激励をお願い致したい。

福井陽一（ふくい よういち）

天理大学卒業後、天理教海外部勤務。1987年ハワイ伝道庁出向、1990年ニューヨークセンターに出向し、文化協会の設立に携わる。2001年天理教ニューヨーク富中布教所設立。ニューヨーク大学非常勤講師（日本語）、コロンビア大学音楽クラスアシスタント、在ニューヨーク日本領事館海外安全対策連絡協議会委員を務める。ニューヨーク天理文化協会副主任、兼日本語学校長。

新刊案内



『おやさと研究所年報』（第25号）と『TENRI JOURNAL OF RELIGION』（Number 47 頒価800円+税）が3月に発行されました。掲載論文等の内容は以下の通りです。

『おやさと研究所年報』（第25号）

- *戦後復元過程における「理の親/親の理」の教説（金子昭）
- *道にたとえられる宗教（岩嶋大悟）
- *第8回伝道フォーラム報告
「アメリカに渡った天理教：移民・戦争・青年の力」
講演1：中山正善2代真柱と天理教の北米伝道（尾上貴行）
講演2：信仰者の戦時強制収容体験が教えるもの（山倉明弘）
講演3：天理教青年会ハワイ大会（飯降政彦）
- *研究ノート：『天理教事典』改訂の過程（澤井治郎）

『TENRI JOURNAL OF RELIGION』（Number 47）

- Susumu MORI : The Meaning, Comparison, and Method of Interpretation of "Mune(Heart)" and "Kokoro(Mind)" in Tenrikyo Scriptures
- Hirokazu FUKAYA : Issue Surrounding Current Youth Poverty and Social Welfare's Response: A Preliminary Study Introducing Tenrikyo's Social Welfare Policy
- Akihiro YASUDA : Toward the Phenomenology of Path: Spiritual Practice and Transformation in the *Visuddhimagga* and the *Spiritual Exercises*

ジェンダー研究会報告「金光教 LGBT 会の取り組み」

金子珠理

3月5日、天理ジェンダー・女性学研究室では、伝道研究会との共催により、井上真之氏（金光教 LGBT 会長、金光教加里屋教会長）を講師にお招きして、標記研究会を開催した。これまで研究室では、宗教における LGBT 問題について、キリスト教や仏教関係の研究者などを招待講師として研究会を重ねてきたが、今回は、天理教と成立時期の近い金光教における取り組みについて報告して頂いた。

LGBT 当事者でもある井上氏は、これまでの生活上および信仰上の苦難を具体的に語られた。金光教の経典の中には、「子孫繁盛・家繁盛」という「み教え」があるが、長男ゆえの「後継ぎ」の自覚にあつて「普通」の結婚ができないことに、自分の「めぐり」が悪いからと、「めぐり」を取り払うために、熱心に祈り水垢離までして、思い悩む日々だったと振り返った。「むしろ信仰がない当事者の方が楽に生きている」ように思われ、信仰があるゆえの苦悩について述べられた。しかし「金光教のすべてが敵になっても神は味方になって下さる」「教祖様なら受け入れていたはず」とのベテラン教師の言葉によって救われ、扉が開かれていったという。

その後、金光教内の当事者とのつながりも生まれ、共励会（座談会）を行うなどして、その活動は『金光新聞』にも取り上げられるようになった。そして、2018年2月、「金光教 LGBT 会」は、各種団体として教会本部の認可を受けるに至った。まずは教内の啓発を目指し、金光教本部や金光学園での勉強会や講演会などによる、地道な活動を展開中である。2019年2月には、同教会本部月次祭の講話にも取り上げられるようになったという。

最後に、活動の支えとなっている「み教え」について述べ、子供がいない悩みに対する、「腹を痛めないで、教え子という子を幾人も授けている」という「教え子」の教話や、「互いに違っているから、役に立てる」という「5本の指」の譬えなどが紹介された。それらの核心にあるのが、立教神伝の一節「世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ」であるという。金光教布教部長の浅野弓氏（女性）が、金光教 LGBT 会の趣旨に言及した際に述べた、以下の言葉にもそのことは窺える。

「『難儀な人を取次ぎ助ける』というご立教の精神を現代に現すのが、私たちの努めであるならば、今の世に生きづらさを感じている人の心に寄り添える教会・教団でありたい。本気でこのことに取り組み、現代に『金光大神でき』のおかげを蒙りたい。」（金光教報『AMETSUCHI 天地』2018年3月号「巻頭言」より）。

井上氏の講演を受けて、活発なディスカッションが行われた。教団の主要なポストに女性が登用されることが、多様性を認める社会形成のまずは第一歩ではないかと筆者には感じられた。

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では、「出前教学講座」についてのご依頼を受け付けております。どのようなことでも、気軽にご相談ください。お待ちしております。

詳細は、担当者佐藤孝則（電話：0743-63-8105、またはメール：tasato@sta.tenri-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。